

## 本を紹介します

### 「やさしい発達障害論」

著者 高岡 健(岐阜大学 精神科医) 2007年12月 発行 図書出版批評社

発達障害論に「優しい」と言う言葉を付けた理由に、高岡健さんの主張が入っている。「『やさしい』著述が何よりも重要であり、本当に分かっている内容ならかならず平易に記せるはずだ」とあとがきに書かれている。私もこの「やさしい」と言う言葉にひかれてこの本を手を取った。読んでみて「やさしい」と言う言葉は著述内容だけでなく、高岡さんの発達障害の人を見る目にも表れていたように感じる。「発達障害の子どもへの治療と処遇は、診断基準に基づいたラベリングや薬物療法以前に、彼らへの理解を前提とした生きやすい環境を整えることに

親と子と教職員の教育相談室 徳永 恭子

きます」と述べている。「発達や成長を賛美するだけでなく、すべての人に潜在する障害と言う生命—精神—社会現象を見つめ直し、『発達強迫』『コミュニケーション強迫』の宣伝に惑わされることなく、文明を越境する関係をつくり出していくこと」が問われていることと示唆している。「あの子は発達障害だから…」とレッテルをはる言葉が教育現場で語られるようになって久しい。子どもを発達障害のある子と、そうでない子に分断しないで、子どもを丸ごと理解することがとても重要であることに気付かされる貴重な本である。

## つぶやき



### 「私の中の『権力者』と向き合う」

鳥取県教職員組合 執行委員 小谷 明寛(小学校教員)

私が20代の頃に、ある先輩教員からこんなことを言われた。

「あいさつできんやつ(児童)は、しばいたらないけん。」

「あの小谷先生。実績がなければ発言しても意味がないよ。」

実績とは、競技大会におけるトロフィー数のこと。当時の私は、この言葉をなんのためらいもなく受け入れ、大会で勝ちたいと素直に思ったし、あいさつが小さければ徹底的にやり直しをさせていた。その頃から、「あいつは強い」「あいつは弱い」「あいつは使えない奴」という言葉をよく使うようになっていた。さらに、その言葉は、子どもたちに対してだけでなく、同僚の教職員にも当てはめて考えるようになっていった。「あの先生がいるから、学校が回る」「できる先生」「できない先生」「使えない先生」…。

当時の自分に言いたい「お前は何様のつもりだ!」と。そして、今もその考えが垣間見えてしまう自分に聞きたい「ところであなたは『できる』先生なんですか?」「で、何が『できる』んですか?」。

私たちは、いとも簡単に権力者(使用者)の立場に立ってしまうことができるのだということ、真摯に受けとめなければならない。また、教職という職業そのものが、「先生—児童生徒」の関係に潜む「支配—従属」の関係性を持ち合わせ、故に、私たちの意識は自らの手によって、“支配者として日々強化”されてしまう可能性があるということに危惧したい。

私なりの解釈ではあるが、「使用者は“数”と“強さ”を求め、労働組合は“個人”と“痛み”に共感する」と思っている。労働組合と言わず、労働者みんながそうであってほしいと願うところではあるが…。さらに、「『共感』のないところに『団結』はない!」とも思っている。そして、その共感や団結を支えるものが、「学び」なのだと思う。私が、自分の意識が権力的であることに気づけたのも、個人の生き方を見つめ、その痛みに共感してきた人たちに学んだからこそだった。だから、これからも学び続けていきたいし、一人でも多くの個人に共感していきたいと思う。